

こいむすめむかしはちじょう

恋娘昔八丈

〔解説〕

安永四年（一七七五）江戸外記座初演。松貫四、吉田角丸の合作。

江戸の町で実際に起こった夫殺しの事件を元に、お家騒動を絡ませています。歌舞伎、新内などにも同じ内容の作品があり、改作が多く生まれ「髪結新三」もその一つです。

〔あらすじ〕

萩原家の子息千草之助は吉原の十六夜という遊女に入れあげ、家宝の茶入れをお家乗っ取りを企てる一味に盗まれます。茶入れ探索のために家を出た家老の息子・才三郎の恋人お駒は、実家に戻って意にそわぬ結婚をしますが、夫となった喜蔵が茶入れを盗んだ一味とわかり、取り戻そうとして殺してしまいます。夫殺しの罪人として鈴ヶ森の刑場に引き出されたお駒ですが、処刑寸前、悪事の一味がとらえられ、お駒の赦免状が届きます。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

鈴ヶ森の段

急ぎ行く。

人の身の捨てどころとや名にふりし、鈴ヶ森の仕置場所。

青竹にて矢来を構へ、あたりにきらめく抜身の鏝、かかり

の役人馳せ違ひ、科人今やと待ちかけしは、この世からなる地獄の責め、忌はしくもまた恐ろし。

あはれ見に寄る諸見物、あすこやこゝに立ち集り

「なんとこの科人も、モウ来さうなものぢや。おれは牢屋を引き出すとすぐに通町へ駆け抜け、それから河岸へ廻つて以上四度見たが、さてマア美しい娘ぢやわい。あれをころりとやるといふは、何とまあ、惜しいもんぢやないかいの」

「アイヤ〜なんぼ顔が美しうても心は鬼ぢや。丙午ぢやあるまいし、男を殺すといふことが、どこの国にあるもの

ぢやない」

「オイ〜〜さやう一途に云はしやんな。女が男を殺すとはモよ〜〜堪忍のならぬわけ。間女房事であらうも知れぬ」

と噂とり〜口々に

「あんまり待つて寒なつた。白水さみずの茶屋で一ぱいせう。サア〜ござれ」

と打ち連れて、皆々かしこへ走りゆく。思ふ事叶はねばこそ憂き事の、恋と義理との諸手綱。不憫やお駒は夫のため、かゝる憂き身の縛り縄。首にかけたる水晶の、数珠の数さへ消えてゆく。屠所の羊の歩みより、はかなき身ぞと観念し、力なく引かれ来る。代官堤弥藤次お駒に向かひ

「最前屋敷にて、役人中より申し渡されしごとく、仔細あるとは云ひながら、かりにも夫を殺したる科は遁れず。重き刑にも行なはるべきを、お上の御慈悲をもつて死罪に仰

せつけらるゝ。ありがたく存じ奉れ」

と云ひ渡せば顔を上げ

「なに事もみな私が心でかゝる身の罪科、露いささかもお上へ対しお恨みはござりませぬ。ありがとう存じます」

と覚悟極めし健気さに不憫と見やる諸役人、涙紛らすばかりなり。お駒は顔を振りあげて「御見物様、いづれも様

夫を殺す大罪人。さぞ憎いやつ大胆者、いたづら者と皆様

の、お憎しみもあろけれど、云ふに云はれぬ訳あつて、夫

殺しの科人と、死恥さらす身の因果、不憫とおぼし一遍の、

御回向願ひ上げます。世上の娘御様がたは、この駒を見

せしめと、親の赦さぬいたづらなど、必ず／＼遊ばすなエ。

可愛い夫へ義理立てば、一親に嘆きをかけ、また親々へ従

へば、いひ交はした夫へ立たず、はてはかうしたあさまし

いこの世からなる劍の山、身を切り裂かれ憂き恥を、さら

すも定まる因縁づく、約束事と諦めても、二世の契りのそ

の人と、一世と限る二親の、もしや群集のその中に見えは

せぬか」

と伸び上がり／＼ても竹垣の透間がくれの人群れに、目も

泣きはれて見え分かぬ心を思ひ諸見物、濡れぬ袂はなかり

けり。『果てしはあらじ』と下部ども

「時刻移る」

と立ち出る。二人の親は竹垣に、隔てられたる親子の別れ、

見物群集は口々に宗旨々々の手回草、折もこそあれ才三郎。

丈八に縄をかけ、群集押し分け矢来のうち

「お預りの茶入れの盜賊喜藏に紛れなき由、この丈八が白

状ゆゑ再び茶入れもわが手に入る。また喜藏、丈八兩人は

この才三郎が親の敵。お上へ委細申し上げ、お駒が命赦免

の状、御披見あれ」

と差し出せば弥藤次取つて押しひらき

「成程々々紛れなき赦しの趣き。親の敵とあるからは喜藏

丈八両人は才三郎の心任せ。お駒はすぐに「親へ、御赦免
なるぞ」

とありければ『はっ』とばかりに庄兵衛夫婦。夢に夢見し
心地して、よろこび涙で道理なり。お駒が縄目とくくくと、
解けて結びし恋娘。千代も変はらぬ御恵み、重ねくくて黄
八丈。昔語りを今ここに、伝へくし筆の跡。世々にその
名を残しけり。